

はじめに

沖縄本島国頭、糸満、渡嘉敷島には、南西諸島の星名伝承の分析・考察にあたって欠かすことのできない特徴ある伝承資料が伝えられているが、いままで十分に調査研究されていなかった。本報告は、それらの現地聞き取り調査及び文献調査報告の概要及び星名伝承の分析・考察を行ない、科学研究費補助金「天文学との連携にもとづく考古学・古代史学研究法の構築」(課題番号 19H00544)の天文学班の研究に関わる基礎データとするものである。

1. 現地聞き取り調査成果(第一日目、第四日～第六日目、第八日目～第十三日目)

(1) 島尻郡八重瀬町港川漁港(第一日目)

- A1さん、昭和13年生まれ、八重瀬町出身、父親は本部町渡久地出身
- ・ユアアカ(明けの明星)。2時頃、だいたい、このくらい(東の方を指さして)。夜明けに東に。
- ・ブリブシ、2時頃、上がりはじめた。ていぬぬ(天ぬ)ブリブシや、小さいよ。
- ・ブリブシ(ブリブシは旧の4月くらいから明け方、イカ釣り、トビイカ)
- ・ニーフアブシ、動かない。ニーフアブシ、目当て。(こぐま座 α 、北極星)
- ・北斗七星をニーブとは言わない
- ・タテープシ(オリオン三つ星)(ミツブシ、クガニツブシについては伝えていない)
- ・ヤーウチィ(流星)
- ・ユバンマンジャー(宵の明星)

(2) 南城市玉城奥武島(第一日目)

- A2さん、昭和5年生まれ、南城市玉城奥武島(おうじま)(旧玉城村)出身、サバニの船大工、A3さん(A2さんの妻)、昭和7年生まれ、玉城奥武島出身
- 星名はA3さんが伝えていた。
- ・ブリブシ、かたまっている。ブルブシ。ていぬぶしやにぬふあぶしめあて 全部にかたまつて。ブルブシ、全部の星(北尾注:したがってプレアデス星団特定ではない)
- ・ユバンマンジャー(宵の明星)
- ・ナナツブシって柄杓。七夕の頃、七つの星、ひしゃく、ニブとは言わない。
- ・フシヌヤーウチィ。お家(おうち)の引っ越し。
- ・イルガンブシ聞いたことがある。

(3) 国頭郡本部町備瀬(第四日目)

- A4さん、大正12年生まれ、備瀬出身
- ・ブリブシ、かたまつて、10くらい。

・イリガンブシ、やくぶし(役星)。それが上がる年は、災害がある、餓死になるとか。ほーちぶし、でてくんどいいことでないよ～

・バチソーキ、竹であんだバケソーキ。ソーキブシ、5つ6つくらいかたまつて。夏。ソーキブシ10個くらい。(民具に見立てたソーキブシ)(一方が空いている。かんむり座の可能性あり)

・天から降ってきた石→カミンチュが、(こしかけて)休む石。カミンチュだから、天から降ってきた石。(右写真)



(4) 国頭郡本部町具志堅(第四日目)

●A5さん、昭和8年生まれ、具志堅出身

・シニグで、「ティンヌブリーブシーヤーヨー ナナガウィードーテユール サー クーガーニー ミチブシヤーヨー ユイサ ワーウイドーティー イユルー スーライ シタリヌ クーガーニーミチーブシーヤーヨー ユイサ ワーウイドーティー イユルー スーライ」と唄われている。

・喜界島、与論島等に伝えられている黄金三つ星の俚謡が異なったメロディーで、シニグという祈りの場で唄われていた。

・旧7月25日シニグ(7月19日から始まっている)

・ブリブシ、ムリブシ、天の川いっぱい輝いている

(5) 国頭郡国頭村辺戸(第五日目)

●A6さん、昭和23年生まれ、国頭村辺戸出身

国頭村辺戸の星窪。A6さんは10歳くらいの頃、明治40年くらい生まれのUさんから聞いた話をもとに星窪を案内してくれた。星窪は不思議なことにあまり草が生えていなかった。のちに田んぼになった。

・昔、お年寄りの方がここ田んぼだったのですよ。この隕石落ちたところが。そして、隕石落ちてくぼちができたものだから、戦後、田んぼができて。

・いつできたのかについて、A6さんは、「それは、ずーとむかし、王朝時代」

・これ、星が落ちたものだから、この辺、地名が星窪となった。

・55年くらい前に聞きました。年取ったおじいさんから何回も聞いた。水もあったから、さとうきびしぼったり。星窪に水わくわけ。隕石おちた窪に水が溜まって、上に川あって。窪みで水が溜まっていた。

・Uさんが田んぼしていた。

(6) 国頭郡国頭村與那(第五日目)

●A7さん、昭和12年生まれ、国頭郡国頭村與那(与那)出身

・ニヌハフシ(星名はニヌハフシのみ伝えていた)

・天から落ちてきた石、空から降ってきた石が元は、山にのぼったところにあつたと教えてくれた。(現在の位置よりも少し上ののぼったところと思われる)

・空から降った石というのは誰でも知っているよ～と教えてくれた。(60代の人や売店の若い人は知らなかった。一定以上の年配(おそらく昭和12年生まれの話者の世代)は誰でも知っていたのであろう)

(写真 国頭村與那(与那)の空から降ってきた石)



(7) 国頭村奥(第六日目)

●A8さん、昭和12年生まれ、国頭村奥出身

- ・親と夜のもぐりに行った。昼はクサバーという魚を取った。与論へ砂糖を買いに行った。
- ・うちのおやじは明治40年くらい生まれだけど、与論へよく權でいって砂糖を買いに行った。黒糖の甕。与論の黒糖はやわらかい。与論島と沖縄、遮断されたけど、密貿易をした。暗いうちに(奥に)着く。アダンの陰に隠れて、夕方、豚をおろす、ヤギをおろす。豚、ヤギを与論からもってくる。与論は戦争の被害が小さかったの。
- ・にぬはふし
- ・ななつの星が並んでいるのです
- ・ななつの星を何と呼んだのか聞くと、「え〜なんと言ってたかなあ、標準語で北斗七星と言っていた」(奥の方言があったものの、あまり使っていないので記憶を辿れなかった)柄杓をニブというが、奥では北斗七星のことをニブとは言わない。「にぬはふし」と言っていた。ニブは、まわりの葉っぱとか。クワズの葉っぱでニブを作った。クバでも(柄杓)つくったけど、クバはもったいないから稀。
- ・七つの星が並んでいるわけ。その星のひとつが北極星。これを見たとて航海(北尾注 北斗七星のひとつをニヌハブシ北極星と認識していたようだ)
与論までどれくらいかかったのですかと尋ねると「半日くらいかかる」

(8) 糸満市糸満(第八日目)

●山嶺毛・アガリミチブシの伝承調査

・アガリミチブシの香炉の位置確認。文献には、アガリミチブシの香炉の位置が記入されておらず、候補は2つに絞る。(第十日目に再度調査を実施)

●B1さん、昭和6年生まれ、糸満出身

- ・北斗七星 ニーブブシ。ニーブ水汲む。木でつくる。
- ・ミチブシ、夏。アガリミチブシという星名は B1さんは聞いたことがなかった。アガリをつけずにミチブシと言う。
- ・フサアゲ(星上げ)、4月。星が上がる。フサアゲ。星上がり。ブリブシが出る。天気が変わる。
- ・ユアカブシ。ひとつの大きい星。(明けの明星)
- ・ナガリブシ。ヤーウチイは、うみんちゅはいわない。ほかの農業の人。
- ・ホーキブシ。イリガンブシと言う人も(うみんちゅで)いる
- ・ブリブシ、小さい(星)がかたまつて上がる。
- ・ウマノファ、台湾ではニーフアと両方見える。フィリッピンではウマノファ見えるが、ニーフア見えない。ウマノファブシは南十字星。沖縄南十字星見えない。
- ・ニーフアブシ、小さく見えていた。北斗七星ニーブブシから探す。

(9) 渡嘉敷島(第九日目)

●B2さん、昭和13年生まれ、渡嘉敷村渡嘉敷出身

- ・母親(明治23年生まれ)から、実際の星空を見ながら南斗六星をニブブシと聞いた。北斗七星は、ナナチブシ。(北斗七星をニブブシとは言わない)
- ・ミーチブシ、ミチブシともいう (オリオン三星)
- ・ニーフアブシ
- ・クガニ 黄金 たいせつなもの くがにんぐわが生まれた・・・たいせつな子どもが生まれた。くがにみちぶしとは言わない。(唄の中で言う)

- ・ユーバンマンジャー ユーバン:夕食 マンジャー:ほしがっている 夕食をねだっている
- ・ナガリブシ
- ・イリガンプシ ガン:願う?

(10) 渡嘉敷島(第十日目)

●B3 さん、昭和37年生まれ、渡嘉敷村渡嘉敷出身

- ・星をめあてにしなくて、山をめあてにした。イノーでブダイ(冬に)。安全に航海するために、山を目当てに。すもぐりで、(ヤスで)突く。息をとめて、15m。20mもぐる。
- ・ナナチブシ、上に来たら夜中何時。東側、朝・・・というように。
- ・ニヌファ、ナナチブシ
- ・彗星がでると、イカ、タコ大漁、釣れる。10年くらい前。イカ:コウイカ(アカイカも釣れる)

●B4 さん、昭和2年生まれ。渡嘉敷村阿波連(出身は兵庫県神戸市湊川)、昭和6年まで神戸。あと宮古下地島へ。昭和11年、石垣島へ売られる。照屋(規正)さんのもとで働く。昭和32年、渡嘉敷へ。

- ・マラリアにかからないように石の上に家をつくる。昭和11年～19年、その上で(夏はほとんど裸で生活する)。玉通崎(たまとりざき展望台)のシーグララーという石の上に6軒かやぶきの家があって売られた子どもが住んでいた。
- ・高瀬貝一斤600グラム50銭で売れる
- ・もぐってサザエ一個さがしてくいるまで船に上がれない
- ・時間、昼:太陽、夜:星(ふし)、月(ちち)
- ・ユアケブシ、夜明け
- ・ゆうはんだけごはん(売られたこどもたちは食べることができない)
- ・ユーバンマンジャー 夕飯をたべるとき。
- ・柄杓のことをニーブという。北斗七星はニーブに似ている。ニーブブシとは言わない。
- ・ニーフアブシ:北極星
- ・ゆるはらすふにやニーフアブシめあて わんなちゆるうややわんどみあて(歌ってくださる)
- ・にぬふあぶし
- ・ユアケブシ、みんなおきるまでに おつゆ一魚の汁、イモを炊いて。
- ・月が昼間みたい・・・イカ取れない。雨、風強い日に取れた。

●B5 さん、昭和4年生まれ、渡嘉敷村渡嘉敷出身渡嘉敷出身(農業)

- ・ニーフアブシ
- ・ナガリブシ
- ・ブリブシは聞いたことある。
- ・ユーバンマンジャー、西の方に出る。マンジャー:ほしがっている。ユーバンマンジャー:おじいおばあが言っていた。(宵の明星)
- ・いりがんぶし:見たことがない(名前を聞いただけ)
- ・ぶりぶし、ていぬぶりぶしや ゆみやゆみい うやぬ ゆしぐとや ゆみぬならぬ・・・ゆるはらすふにやにぬふあぶしみあて わんなちゆるうややわんどみあて (たとえば、お祝いの席で歌う)
- ・ちち 月
- ・十五夜、天ぶら、いも、シークワサー、果物:りんごとか供える

(11) 渡嘉敷島(第十一日目)

●B6さん、昭和23年生まれ、渡嘉敷村渡嘉敷出身

- ・ナナチブシ(ニブシとは言わない)
- ・ブリフシ
- ・ニヌファブシ
- ・ユーバンマンジャー、夕ご飯を欲しがっている。子どもの頃、ユーバンマンジャーが食いたそうにしていた。(宵の明星)

●B7さん、昭和8年生まれ、渡嘉敷村阿波連出身

- ・イノーに漁に出た(北尾注 潮がひいたときにできる珊瑚に囲まれた池(礁池)をイノーと言う)
- ・イラブチャー(ブダイ)を取った。昼。イノーで。
- ・12月、1月は電灯もぐり。夜。イラブチャーも電灯もぐりでイノーで夜取った。(北尾注、夜、電灯潜りでイラブチャー等を突く)
- ・イカ釣りやった。アオリイカ。(コウイカはもりで突く)
- ・ユーバンマンジャー 夕方のごはん:ユーバン(宵の明星)
- ・月の出るとき、東から月が上がるとき、準備をして、月の出るとき水面出ると満潮。(漁場につくと)月があがって潮がひいてくる。月が上:干潮。満潮の時出て、着いたら干潮。引き潮になれば船あぶない。サンゴ礁。
- ・旧6月くらい、梅雨明け、「かーちべ」
- ・にんがちかじまい(フサアギは聞いたところあるようだが、はっきりとしない)
- ・2, 30年前、サシバがよくきていた。いま、宮古へいつている。「ちゅーしーみー」と渡れなくおいていかれたサシバが泣いていた。
- ・ミチブシ(くがにみちぶしでなく単にミチブシ)
- ・北斗七星の島の名前はわからない。
- ・ミチブシとともに干潮、ミチブシここいったから干潮と言った。
- ・ブリブシは言ったが目標にするのはミチブシ
- ・チチ(月)があがったら満潮。沈んだら満潮。

(12) 国頭郡今帰仁村星窪(第十二日目)

●B8さん、昭和23年生まれ、今帰仁村星窪出身

- ・B8さんの父親 B9さんは、「元はマリー連山と同じ高さであった所が星がぶつかって窪んだのが星窪(写真左)である。大きな石が落ちてきてできたのが佐我屋(さがや)ミーという島小(しまぐわー)である(写真右)」と伝えていた。(今帰仁村歴史文化センター 2012)
- ・さがやミー。そこは、潮にあわせて潮ひいた時歩いていける。そこのお墓はいっぱいあると思います。



(13) 糸満市(第十三日目)

ほぼ東に設置されているのがウヌファ(東)の香炉。それより少しずれて右に香炉がある。これがオリオン三つ星の香炉の可能性はある。実際、3から4度南をだんだん南へとずれてのぼっていく。したがって、右(南)のほうがオリオン三つ星(あがりみちぶし)の香炉であると思われる。(要 追調査)



サンティンモーについては、一日目聞き取り調査の B1 さんの家の海と反対側にある市場で、「拝みをする人」の名前がわかった。いつも酔っぱらってこの辺りに来ているということだが、今日は不在だった。次回の課題である。

2. 文献調査成果(第二日目、第三日目、第七日目)

(1) 沖縄伝承話資料センター(第二日目)

伝承資料センターのアーカイブのなかに星名伝承関連資料があることを確認した。特に、黒島のケンタウルス α β 関連の伝承の多様性については特筆すべき多様性があることが判明した。

(2) 沖縄県立図書館(第三日目、第七日目)

市町村刊行物に掲載されている星名伝承関係資料(今帰仁村星窪、本部町シニグ、糸満市史等)を調査し複写した。

3 調査所見

本調査の所見を下記の3点に分けて論じる。

(1) プレアデス星団の星名

南西諸島のプレアデス星団の星名は群れ星のグループであるという先行研究に疑いを持たなかった。(内田1949、野尻1957、野尻1973。北尾2018等) しかし、科学研究費補助金「天文学との連携にもとづく考古学・古代史学研究法の構築」(課題番号 19H00544)による2019年8月からの調査を通して群れ星のグループの星名がプレアデス星団のみを意味するのではなく、「空全体の星」「プレアデス星団以外の一か所にまとまった星列」を意味する伝承事例があることが明らかになった。星名は聞いていても具体的な形状、季節を伝承していないケースが多かったが、下記のように本調査でそれぞれほぼ同数の伝承資料を記録することができた。今後も調査を重ねデータ数を増やしていきたい。

プレアデス星団のみを意味

① 沖縄本島国頭地方

本調査では、プレアデス星団のみを意味するケースを記録することはできなかった。

② 沖縄本島南部

・島尻郡八重瀬町港川漁港: ブリブシは旧の4月くらいから明け方(プレアデス星団が出る季節を伝承)

・糸満市糸満:フサアゲ(星上げ)、4月。星が上がる。フサアゲ。星上がり。ブリブシが出る。天気が変わる。ブリブシ、小さいの(星)がかたまって上がる。

全体の星

① 沖縄本島国頭地方

・国頭郡本部町具志堅:ブリブシ、ムリブシ、天の川いっぱい輝いている

② 沖縄本島南部

・南城市玉城奥武島(第一日目):ブリブシ、かたまっている。ブルブシ、ていぬぶりぶしやにぬふあぶしめあて。全部にかたまって。ブルブシ、全部の星(したがってプレアデス星団特定ではない)

(2) オリオン座三つ星の星名分布及び信仰

シャルル・アグノエル氏は、アガリミチブシ(agari-mitsibusi(hoshi))について、「東ノ三星[les trois e(/)toiles de l'Eest]」「ten no kami(天の神)[dieux du ciel]」(Patrick Beilleveire2010)と記している。即ち、アガリは、「上がる」という意味ではなく、「東」という意味である。

シャルル・アグノエル氏の作成した図にはアガリミチブシの香炉が記されておらず、現地において確定できなかった。

また、アガリミチブシについて、いままでのフィールド調査、文献(野尻 1957 等)では記録されていなかった。本当に伝承された星名かが疑問であったが、大城政秀氏(明治 38 年生まれ、元糸満市史編集委員会委員長)は、アガリミチブシについて、「冬の空のやや南天に見られる星で、オリオン座の三つ星のことである。糸満では、タティーブシという。東の空から上がるとき、縦一列に並んでいるところから、そう呼ばれている。アガリミチブシが、夏真上にくると夜明け前で、冬は低く下がった頃に夜が明ける」と記している(大城 1991)。

しかし、過去の調査において、アガリミチブシの星名はシャルル・アグノエル氏と大城政秀氏の糸満のみであり、1979年、2020年に実施した調査では、糸満においても記録できていない。

おわりに

糸満山巔毛のアガリミチブシ、本部半島地区のシニグ等に見られる星名伝承の分析・考察にあたって、実際の祭祀等の現地調査が必要であることが本調査によって明らかになった。しかしながら、緊急事態宣言により実施できなくなった。令和4年度の課題としたい。

文献

内田1949:内田武志『日本星座方言資料』アチックミュージアム、1949、p.22。

野尻1957:野尻抱影『日本の星』中央公論社、1957、pp.292—296。

野尻1973:野尻抱影『日本星名辞典』東京堂出版、1973、pp.174-179。

北尾2018:北尾浩一『日本の星名事典』原書房、2018、pp.45-59。

北尾2021:北尾浩一「天文民俗学試論187, 188」『天界』東亜天文学会、2021(掲載予定)

Patrick Beillevaire2010:Patrick Beillevaire,OKINAWA1930 NOTES EHENOGRAPHIQUES DE CHARLES HAGUENAUER, 2010, p.69。

大城1991:大城政秀「天文」『糸満市史資料編 12 民俗資料』1991、p.374。